

翻刻『武烈天皇鑑』（下）

翻刻の会

一、底本には刷りが比較的良好と思われる、大阪府立中之島図書館所蔵、元題簽・元表紙の七行百丁本を用いた。

二、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。

1 本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類、会話の途中等では改行しなかった。

2 各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を（ ）で示した。

3 仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「二」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」とした。

4 漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。

5 漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。

6 特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。

7 畳字は、平仮名は「ゝ」、片仮名は「ゝ」、漢字は「々」に統一した。ただし、「く」はそのまま残した。

8 文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。

三、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会（学部学生の研究会）の会員によってなされた。

伴旭洋、稲川あい、樽崎悦子、武田芳子。

文字譜、改行及び本文の最終確認は山田和人が担当した。

（山田和人）

武烈天皇臆（下）

たつ。手練しゅれんの頓機とんきぞ。たぐひなし。

長者ちやうほとんど感じ入。ホ、ウ天晴てんせいなる働。かやうに汝が性根をためすも。頼度太事有り。何によらず。頼たのれてくれふや。やは改つたるお旦那の仰。なんであらふと身命しんめいを抛なげは家来の役。ヲ、其一言を聞て祝しうちやく着せり。元来某は九州者。若わかかつし時は算学さんがくに心をよせ。それからおこつて。人を殺ころして国もとを立のきたり。今にても其人の余類有て敵とねらは。汝我になりかはつて返り討うにしてくれい。かくいへば卑胸ひけう未練に。命をかばふと思はんがさにあらず。此国の配所をぬけ出。御行衛ぎやうゑしれざる玉穗の宮を尋奉り。長者が（五十ウ）貯置たくはへたる。金銀財宝なげうつて軍用のかねとなし。当今武烈天王の悪あく逆ぎやくを切しづめんとめと。聞より狭手彦はつと計に感心かんしんし。かかる太義を思したゝるれば御主人の御命。太切になさるゝは天下の為宮はるの御為。何故に又。人をあやめ給いろひしぞ。ヲ、されば。其比大友の金村といふ人。天文算法の奥義おくぎを極メて唐もうこしより帰らるゝ。伝つてを求メて望め共。伝授の秘書ひしよを我にあたへざる遺恨いこん。ちくらの磯いそにかゝりたる帰朝の舟へ。夜にまぎれて窺のぞひ寄り。伝授の卷々盗取我小船すせんに乗りうつる。其音に金村目さめてつゝいてばつかけ飛このる。はづみに舷ふなばたを踏ふみはづし波間にざんぶと落けるが。（五十一オ）ういつ。しづんづ。四五反計たりもおよぎより舟の舳先はつみに取付とク。真類まつかうぬき打に。たゝみかけて切付中れば。さしもの金村ウたんだよりはりによはる。所をとゞめの刀ハルさいたりと。語中る内より狭手彦が無念の顔色。

眉毛^{まゆげ}さか立目^{たちめ}は血^ちばしり。扱^うは父。金村殿^ウの生死^ウの行衛^ウしれざるこそ断^{ハル}。飛^{ハル}かゝつて親の敵。只一トさしとは思^{オモ}へ共。宮へ
の忠義。天下の爲になる長者。うつも討れずこたへかね。思はずしらず反^{そり}を打て詰^{つめ}よるに。ひく共せず大野^{オホノ}の長者。イヤサ
こいつ下郎め何をひろぐと。声^{ハル}かけられて。イヤかるくしき今の御物がたり。金村殿^ウの由縁^{ゆかり}有てまつ此ごとく詰^{つめ}かけ。若^{もし}
もの事の有時^ウはどの(五十一ウ)命をもつて。宮^{ハル}の御用に立給ふ。はかりながら下郎めが。御ぬけんの為でこはります。
ホ、ウ其心^{こころ}底なれば満足く。最早^{もはや}部屋へさがつて休息^{きぎよく}しろ。ナアイ。お旦那にも。汝もと。主従^{しゆじゆ}たがひにさぐり合つたる
心と心。奥^{ハル}と口^{くち}とに立別^{トル}れてぞ三重^{みへ}へ世をしのぶ身にぞしるけき秋^きの風。暮待^{ハルフシ}顔に。玉穂^ウの宮。女姿^{むしあきぶ}の虫商人^{ムシヤウジン}。秋の千ぐさ
の花籠^{ウツカ}に虫籠^{ウツカ}。とりそへ持給へば。野見^{ノミ}の弥綱太有熊^ウがになふ荷箱^ウはかるけれど思^ヒひは。おもき長者^ウが屋形^{ハル}。中戸口^{ナカド}に佇^{たず}
て。サアく召ませく。これは上^調がたまぐずが原の色^{ハル}を音^ねになく秋の虫。(五十二オ)求給^{フシ}へ買給へと詞^{フシ}の玉をのべければ。
それと見るより照日^中の前。奥^{ハル}の人めを忍^{ハル}ぶずり。走り出れば弥綱太^{ワキ}声^{ハル}かけ。御父^調長者のうばゝれたる。錦^{ハル}の御旗^{ハル}を取戻^{ハル}さぬ
其内^中は。今迄^{地ウ}の通り宮のお傍^{そば}へは。叶^{ハル}ふまじとせいすれば。姫^{シテハル}はかなしくハア。はつと計^{ハル}にさしうつむきとかふ。いらへ
も泣居^中たる。かく共^{ハル}しらで。母^中の波^{ハル}の戸^{ハル}つきく引つれ立^{ハル}出^{ハル}て。ナフ姫。そもじは爰^{ハル}に何^{ハル}してぞ。あ^{地ウ}の両人^{ハル}は誰^{ハル}成^{ハル}ぞや。
さればとよ。自^{地中}が京内^ウ参^ウりせし折^{ハル}から龍田^{ハル}もふでの道^{ハル}しるべを頼^{ハル}んだる。兄弟^{ハル}の人々と。いひまぎらせば。ヨ、みればやさ
しき虫商人^{ハル}。都^中で姫^ウのしるべとある(五十二ウ)からは。価^{ハル}はいとはぬ虫^{ハル}は残^{ハル}らず花^{ハル}だんへはなしや。あいくくと。
玉穂^{ハル}の宮。詞遣^{ハル}ひもなりふりも。やつし給へば弥綱太^{ワキ}も。手伝^{ハル}ふ手^{ハル}もとは。さゝがにや。いともけたかき御顔^{ハル}ばせのあてや
かさに。姫^{ハル}はなをしもたへかねてあこがれへ庭^{ハル}に。つどひより。千草^{ハル}の花^{ハル}に。はなせる虫^{ハル}の数^{ハル}くを露^{ハル}に。やしなふ噴壺^{ハル}に

手づから流す瀧の糸千筋百筋糸ずゝき。みだれ蜚。たるら虫。色もはづかしあさがほの。花におくる、秋のつゆと。君が袂をひかふれば。飛こむ野見の有熊が。せいてあはせぬ色里の。轡虫よりうしやうし。叶はぬ（五十三オ）恋をする時は。こがね虫を思ひ出す。其金より玉虫より野べの錦のはた折虫を。取かくしたる父にくし。母いとをしとなく虫の。鳴音はなくて。諸共に。まねく尾花にふちばかま。たがぬぎ捨しねたましや花を。しきねにふたりがついに。ゆめまほろしの世の中は。世をうつせみの。うつゝ、なと。又引わくれば。照日はいとゞ。かきくもりさりとては弥網太殿。なぜ其様に。つれないぞや。しばしの情。有明の。火とりむしかやこがるゝ此身。よれば。ふり切ルきりゝす中につれなき。甲むし。あれゝあそこに毛虫がとにげる。ふり（五十三ウ）して近よれば。宮も思ひにくれ給ひ。たがひに恋のうき涙母は芝蘭の香に匂ふ萩の。うはかせ日ぐらしの。むしの羽衣うすくとも。すへの契りの厚かれと深き。思ひをちかひける。波の戸御ぜん興に乗じコリヤ乳母。虫商人は勝手へ伴ひ。今宵はゆるりと一宿させよ。あの妹は姫の部やへつれ行。秘共も打まじり。都のはなしを聞てたのしみや。そんなら母さまもおしづまりなされませ。アレねよとの鐘がなるはいなアと。宮を伴ひ姫はお部屋へ。波の戸御前奥のへ一間に入給ふ。

其夜も既に。（五十四オ）ふけじつまり大友の宿称狭手彦は。討にうたれぬ亡父の敵。しばしは俱に同じ天をいたゞく共。此家に足はとめがたとしと。昔に返る侍出立。あの前裁の裏門より立のかんと。花畑づたひ盤桓と立もとをり長者がふしたる一間のかたをはつたとねめ。エ、口おしや。今月今日始めてしつたる父の仇。めぐり大野の長者が首。討とらいで叶はぬ所。助置は忠義の道。宮御聖運ひらき給はゞ。我こそ宿称狭手彦と名乗りかけ。本望とげいで置べきか。父

金村の亡魂。此年月幾の御無念。察しやられて此むねが。(五十四ウ) 裂る様などつかと座し。悲歎の涙。せきあへず。時にあやしや椽先の。橐吾や万年青の陰しげみさつく音に狭手彦ふしぎと。よくくすかし見てければ。長者が切たる蛇の首。きらめく眼はおもとの実。末葉にのぼると見へけるが。ぴんとはぬれば鳶直に。手水鉢のまん中へ。飛こむはづみの水煙。扱こそ執ねき毒虫の恨を報ふと。いひしもかくやとかけ上り。縁側につゝ立て。眼も放さず見とるれば。水に映ふ星の光に蜷の。口より吹出す毒氣沫湯玉のごとく沸れば。(五十五オ)

諸手を組で狭手彦が。しばし見入ッて。ハ、ア、潔く。誠に周易。坤の卦の用六に。群龍首なきを見るといひし。辞を以て是を考ふれば。龍蛇の勇猛は首にとまり。其仇をむくふといひならはしたる諺偽ならず。此毒水を以て長者一家を。取殺んず蜷の怨念。今目前に見て。此狭手彦が父の敵を。見遁すとは虫にもおとり。待冥加にも尽果たるかと。思へば恨骨髓に徹し。踏込で只一打と。反を打てかけ出タせしがまてしばし。いかに父の恨とて。今長者を殺しなば。たとへ宮の御行衛がしたりとも。(五十五ウ) 誰有て君を見継。軍用の助けとならん者覺なし。しばしの無念を堪忍するは。宮の御為。一天四海の民のためと。思ひとまりる狭手彦は。類まれなる忠臣也。

折もこそあれ姫の部屋の柴戸の内。とび石つたふ駒下駄の。音にあはやと忍んで菊の。ませ籬に。見る人有り共しら紗綾の。かけ帯携へ照日の前そこよ。爰よ松がえに。ひらりと打かけ傍の石に。足つま立て首にまとひ。既にかふよと見へけるを。

狭手彦かけ出コハ逸興。はやまるまいといだきとむれば。ヤア駒平かいの。情と思ふてこ、放て。死なせてたもと(五十

六オ身をもだへ。声も得立ずなく涙。吳椽^{くわえん}づたひに野見の弥綱^{やう}太有熊^ぐが。出あひがしらに二人^{ふに}があらそひ。あら心得ずと虫売^{むしうり}の。荷箱^{へん}の内より大小^{ちやう}取出し。差足^{さしあし}。ぬき足闇^{あふみ}はあやなし。

照日^{てい}は猶もむせび入。何かくさふ自は。此国へさすらへの。玉穂^{たまほ}の宮さまと浅からぬ中なりしが。父上にぬすまれし錦^{にしん}の旗^{はた}といふ物。取返して宮の御家来。弥綱太殿に渡さねば。と、様とて容赦^{ようしや}は有まい。親^{おや}の難義^{なんぎ}を見るも悲しく。齊^{ひら}でない身のあかりを。立ん為の此有さまと。聞より狭手彦力^{せうぢきりき}を得。ホ、其御物語を聞たれば。もはや宮に逢奉^{あひまう}りしも同然^{どうぜん}。(五十六ウ)子細有て此駒平。本名はあかさね共。宮方へ無二の忠臣^{ちゆうしん}と。聞に嬉^{うれ}さ照日^{てい}の前。木陰^{きゐ}に忍ぶ弥綱太^{やう}は。下郎^{げらう}が本名誰^{たれ}なるらんと。耳をそばだてたち聞ク所へ。光^{はる}りまばゆき。手燭^{てしよく}の影照日^{えいしやうぢ}の前は氣もさどく。アレ父上^{ふじやう}か母上^{ぼじやう}か。見付らりやんな駒平と。椽^{えん}のへ下にしのばすれば。

程なく出る長者^{ちやうぢやう}夫婦。火影^{へい}にすかして。ヤア姫ではないかいの。アイ。さつきにから。虫^{むし}を聞いていやんしたと。まぎらかせば。ヲ、身も奥におこされて。是へ出たれど。目^めがさめぬと欠^うまじくら。手水鉢^{てすい}の杓^{しやく}追ッ取。漱^{うがい}にか、れば椽^{えん}の下より。ア、申^{まう}お手水^{てうづ}。しばらくまたれ(五十七オ)ませいと。声^{こゑ}をかけて這^は出る夫婦^{ふうふ}見るより。ヤアそちは家来^{けらい}の。ナイ駒平めでごはります。ハレ思ひがけない所に忍んで。身が手水とめたる心底。イヤ其水は毒でござります。おとめ申たは。天下の為に成給ふ。御太切なるお命故と。いふに驚^{おどろ}く大野^{おおの}の長者。妻^うに手燭^{てしよく}をか、げさせ。水中^{すいちゆう}をとつくと見て。アレお見やれ波野戸^{なみの}。奥にていひし蛇^{へび}の首。ほんになあもふ死切ては居るそうなが。敵を取んとは恐しい性根^{しやうこん}な物。ハ、くくく。蛇計^{へび}ではない。性根の恐ろしいはあの駒平め。夜ふけ人しづまり。侍に出立て椽の下に。(五十七ウ)忍んでいたはうぬく

せ者。子細をぬかせ。イヤそれは。サアなんと、。問詰られてはつと計にさすがの狭手彦。照日の前も気の毒げに。さしう
つむけば玉穂の宮も弥綱太も。しのんで始終を聞居たる。

大野の長者庭におり立どうど蹴すへ。ヤイ下郎。うぬは我手にかけし金村が余類じやな。まつすぐに白状せずんはまつ二つ
と。提たる一腰ずはと抜たる刃の光。照日の前は差当ッて。何といはん思案もなく。ア、これ申。はやまつて給はるな父上。
はづかしながらあの駒平の。有つきやつた時よりふつと馴そめて。いつにない今宵の忍び路見（五十八オ）付られ。思ひも
よらぬ疑ひ受てあの人の。難義しやるが悲しさに。おしかりもいとはず白地に申ます。イヤこれ姫君。そりや何おつしや
る。ハテ隠せばそなたの難義になる。デモそうおつしやつては。すまぬおまへの身の上。太事ない自はしかられても殺され
ても。いとひはせぬといはせも果ず。ホ、望にまかせ父が手につかけ。殺してくれんと白むくの。雪の肌氷に氷の切ッ先。あ
ばらへぐつとつ、込めば。是はと狭手彦宮主従。母の波の戸氣も狂乱。長者を引のけ手負をかこひ。エ、どうよくな日比か
ら。夫は姫が望次第といふて（五十八ウ）置て。今更不義とはいはれまい。ナ、なんで殺さつしやる。わけが立ねば堪忍せ
ぬと。泣わ、れ共耳にもかけず大野の長者。女が歎きは物数ならず。一通りいひ聞かせんは身が家来。駒平とは世を忍ぶ仮
の名。大友の狭手彦。それへ出いと本名よばれて。きよつとせしがちつ共動ぜず。ヲ、推量に違はず。我こそ宿祢狭手彦。
父金村を討ッたる御刃。娘を手につかけ敵討をわぶる下繕ひか。卑胸至極と恥しむれば。

ホ、其ごとく心の廻るはことほり。此長者が金村を討たりといひしは。跡方もない偽り。汝が五つの年唐土へ渡ッたる。父
大友の金村とは某。（五十九オ）エ、イ。其親人が親人を討たりと。さも有つべうの給ひしは心得ず。十八年以前。五つや

六つの年別れし某を。舩狭手彦と見しり給ふが不審の第一。ヲ、そう思ふは尤ながら。たとえば鳥は。何羽よせても皆黒く。同じ毛色の鳥なれ共。多くの中にも。我子によつく見分けて。親鳥が餌をあたるが天性。ましてや人として五六歳の比迄ぞだてたる。舩が面ざし忘るべきか。此家へ奉公に來りし始より。何角に付てためし見れば。玉穗の宮の御有家を尋ね。謀叛をすゝめ奉らん志。けなげなりとは思へ共。幼少より母方の祖父（五十九ウ）三輪の大臣の養育にて。長袖の家にぞだつたれば。武芸の祢覚束なく。太刀打にて。試に。目を驚す早わざ。然れ共大將に成べき者が。短慮不才にては叶ふまじ。知謀の程を計見ん為。金村を討たりとあらぬことをこしらへて。恨に恨をかさねさせ。もふ切かへるか。討かくるか。思へ共相手にならず。無念を隠す堪忍情。舩ながらも天晴。大義を思ひたつ。器量神骨そなはりながら。色に溺らず、密（六十オ）通して。人の道にそむきし浅ましさを。娘を殺し其恥を。つゝまんとかくはからひし。父をむごしと恨むなよと。しほれぬ顔にはらく涙。親子の名のりは余所になり。宿称も何といひわけなくさしうつむいてゐたりしが。コリヤ妹。此期に及んでつゝみ隠す事はない。玉穗の宮の御事そちが身の上。有やうに申し上ケよと。いふに母は涙ながらコレおとぎの。身のいひ訳になる筋あらば。爺御の疑ひはらしたもといだきおこせば。手負はくるしき息をつぎ。扱はおまへは。自が兄さまか。とくにもそれとするならば。宮さまへお（六十オ）引合せ申さふ物。つねより狭手彦を。一方の大將に。頼たいとお望故。いとしい君が為じや物と。父上すゝめて日外の京内参り。三輪の大臣さまに近より。玉穗の宮さまの。お頼の様子申されば。孫の狭手彦は入唐のるすとして。官軍を集る錦の御旗。自に渡されしを。父上に奪はれ

し身の難義。親をかばへば君へ立す。死なふと覚悟極しを。助けられたる恩返しに。忍び男といひしは兄さま。今迄は駒平く。沢山そうにもつたいなや。其罰があたつて。わしやと、様の手にかゝり。死ぬると思へば恨は(六十一オ)残らぬ。はかなく先だつ自を。不便と思ひ錦の旗を。宮さまへおもどしなされて下さんせと。いふ声もはやたへぐに知死期。まつ間ぞいぢらしし。

金村もよはる心を鬼になし。ヤイ娘。錦の御旗を盗取しは。玉穂の宮へ差上ん父が心底。過し上京の帰るさより。かの御旗を。汝が隠し忍ぶていたらく。扱は謀叛自立の志有ル人に。京都にて馴なしみしかと疑ひし其上に。駒平と密通せしとの白状。不義に不義を重ねし不届キ者。いづれの道にもたすけ置れずと一ト刀突込。旗の出所謀叛人の(六十一ウ)名所を。

詮義せんと思ひの外玉穂の宮の御情を蒙り。三輪の大臣殿より。御旗を受取しなんと。似たく敷いひわけなれ共。證據なければのみ込ず。胡論く。いふに母はむせ返り。今死ぬる此娘がなんのうそをつこぞいの疑。ぶかいどうよくなて、ごの心。なんぞよい證據はないかこれなふと。手負にすがり泣きけべど。ひるまぬ父が疑ひを。何と晴さん方もなく。妹が苦痛狭手彦も。我身にせまる胸の内。是非も涙にかきくもる。

折もこそあれ綱太が声。先帝の立太子玉穂の宮御出なりと。柴戸の内よりよば、りく(六十二オ)書院にいざなひ奉れば。女でたちを其儘に。いとも畏き大君姿。花籠たづさへゆうくと。座につき給ふ御粧ひ。はつと恐れて金村狭手彦敬ひ。あがめ奉る。

宮も涙にくもらせ給ふ御声にて。最前より忍んで始終を聞つるに。兄弟不義の疑ひうけ。不慮の間違父が手に。かゝる哀

れを見る事よ。丸が手馴し此花籠又の世迄もかはらぬ心恋草の。かたみの種とたびければ。

金村はつとおし戴き。色よく見ゆる此はなも。咲ぬさきは色もなく香もなし。娘が心も其ごとく。忍びく／＼に宮につかへ

奉ル（六十二ウ）事。つゝみかくして詞の色にもいださねば。親なればとてしるべきか。都にて謀叛の志ある者に馴したし

み。錦の旗をあづかりしと。疑ひそめたがそちが不運。父が手にかゝるも宿世よりの約束か。不便の者の身のなる果。コ

リや宮さまの御賜と母諸共にさしよすれば。姫はいまはの目をぼつちり。君の姿を打守り。御花筐を。手にふれてわつ

と泣き。とゝさんかゝさん。どう思ひ明らめても。お顔を見れば。わしや宮様に離とむない。名残おしいと。思ふたとて

くやんだとて。どうで死ぬるで有ふ物。せめて息の有ル内に。父上も（六十三オ）兄上も。宮様へお味方と。申上て下さん

せと。心計はあせれ共。うつらふ色の花の香や。恋しき人の手馴れし物を。筐と名付そめし事。此時よりぞ始りける。

金村立て上段の。柱にかけし万度のお祓。箱打ひらき内より取出す御剣と御旗。台にそなへてさゝげ出。某先年唐土へ

渡り。一とせ余りも学問せしを。異国の天子に荷担し。叛逆の幾有ルと人の讒言。其申訳立がたく密に帰朝し。算学の

つもりをもつて。山を均海を埋。多くの田畑をひらき。此所にて大野の長者と時めき。十八年の只今宮と盼に廻り合しは。

（六十三ウ）金村が身のほんぐはい。扱それなるは我舅三輪の大臣のさゝげられしにしきの御旗。ならびに其一振は。三種

の神器ずい一のほうけん。某方寸のはかりことをめぐらし。うはひとり候は。つま浪の戸が比類なきはたらきと。つゝしん

でのべけるにぞ。

宮ほうけんを御手にふれて渴仰あれば。波の戸涙おしぬぐひ。今日帝さまのみゆきの舟へ。浦の長をかたらひ近よつて龍女

とあざむき。其ほうけんをばひとつて。水底をくぐり帰りしも。もと自は此浦の小波といひしかづきの蜚。いやしい（六十
四才）腹にもうけたる娘なれども。宮さまの御世にならば女御后にもならふものを。位におされ果報にうてゝ。こんな死
をするかはいやと。いだきしむれば。手負も母を力ぐさ。宮の御顔つくぐと。ながめては泣見ては泣。エ、どうぞ仕やう
はない事か。命が自由になるならば。御出世なさるゝ首途の。御旗上ケが見て死たいと。叶はぬ事をかこつにぞ。不便と君
も御感の涙。哀れを催し人々は前後。不覚に見へけるが。

かくてはあらじと二人の若者つゝ立て。照日の前の末期の望。君の出世の御旗あげを（六十四ウ）見せ申さんと。しげるし
の竹きりくしやんと枝打て。思ひくしに旗竿しつらひ。

綱太は錦の御旗に。かざす印は園生の菊の赤白二輪。宿衾はかしこの松がえにかゝるかけ帯。さきだつ妹が血しほに染
る子持筋。是大友の徽号。家名くちせぬ蜚の頭をつらぬきいさましく。宮の左右におし立て。

金村悦喜の眉をひらき。ヲ、いさぎよし狭手彦弥綱太。扶翼と成て暫く爰に皇居をしめ。諸国の軍勢催促し。せめのぼる

物ならば。宮の聖運ひらかせ給ふはまのあたり。我は先朝播逃の臣。ふたゝびつかへん謂なし。今はの（六十五才）娘を

いざなひて。此場を去は君へのおそれと。いだきかゝゆる父母の。かたに両手を打かけて。しほるゝかほの花がたみ。御旗

あげをことぶきて。よろこぶ計。ものいはぬ。花にかことの御名ごり。なみだは夜はの秋のつゆあしたの。風に翩翻と。ひ

るがへしたる錦のはた。白きと赤き。菊は日光月光の。みかげにたとへし日月の。旗のいはれや大友の家に伝ふる子持

すじ。毒蛇の首梟の紋君臣。二本の旗じるし故実を。世々につたへける（六十五ウ）

第四 佐用姫道行

世の人の。とをく思へど近きもの。行衛へだてし船路と恋路。いとし殿御を。したひゆく身には。千里もとをからで。むざんなるかなさよ姫は。姉清瀧の介抱にて。都の便聞しより。身のかくれがを忍び出けふ思ひたつ浦の波。ひれふりしより。うき名は高き。松浦山呼名の。島の玉がしは。我姿にもわかれゆく故郷の。それもへだ、りて。旅だつへ日数。幾泊ゆきの。の。(六十六オ)人目よぐらんと。北海道を。よくればいとゞうき事の増田の。池に袖ぬれて爰は美作。しほだれ山。つねならぬ身の妹をいたはる姉の主あしらひ。かいどりしやんとか、へ帯。どれくしめて上ましよとむすぶ糸にしのもろかづら。ア、姉さんもつたいなやと。心も春のゆふ暮の霞は。ひとへな、へ八重。桜谷なるは、そはら。さきだつ梅ははや散て梅花にかほる笠の端に。ふりさけ見れば天の原。風にふきちる。二日の月我細まゆに。かげとめて。所の名さへ三日月の。里を過(六十六ウ)れば里人の。ちやさやよふさの声く、に臨時の祭りの。彼方や。繁木がもとにむらだつ灯燈。朱の玉垣宮柱。いか成ル神にてましますと尋給へば。清瀧御前心付なふ。あれこそ御身の氏の神。母うへの都より本国松浦へ入部の時。俄に産の心地とて。此佐用郡でもうけ給ふおことなれば。さよ姫と名付給ひしぞや。自はまだ七つの年。おぼろに覚へし。宮居は是と夜目遠目。笠を取ル手に額づけば。姫も信心いやまして。爰で生まれし自が。今又同じ懐胎にて。この御社を。(六十七オ)わくらにはに。おがむもふしぎ。我く、に忌や穢のなきならば。神に詣て銘々の。夫くの武運の祈せんものを。心計の太祝。太布さらす国ぶりの。手業まなんで神いさめとほどく。か、への白たへ浅黄。神に手向の青幣。しらにぎて手もともゆらに姉妹は。まきの小島の賤の女ならで。いづれおとらぬ晒のわざく。立波がく。瀬

々のあじろに。さへられて流るゝ水をせきとむる。所からとてな。橋崎の。其橋柱。千本^{ハル}の宿は名のみに銚磨^中がた。風がもてくる磯^{いそ}の波。どうど打てはさあ。さつと引^キ。沖^中の(六十七ウ)なげいししよんぽりと。かはくひまなき苔^{こけ}ごろも。すそにうき草。ちりくちどり。なくねあはれにあはちしま。姫路は跡^中に加古^{かこ}の川。ふねよ駕籠^{なぐら}よと。いたはれどなさけのたねに身^{ハル}もおもく。心もおもきいわたおびしろいとあかし。ほのぐとあけがた。つぐるからす崎^{さき}。生田^う武庫^{いたむこ}やまよそに見て。鳴尾^{なるお}はあれときく。からに去年^{こぞ}の初夏^{はつちウハル}はつこひに。君とねし夜のふねのうちおもひ。出せばなつかしき。緑^{みどりア}にしるき都くさ御影^ウの。森にぞつき給ふ。(六十八オ)

やすらふ向^{むかひ}へ。のさく来る大男^{きた}。ほくそ頭巾^{ブキン}をすつぽりかぶり。玄能^{げん}鉄挺^{てつてい}繩^{なは}からげ。風呂敷^{ふろしき}包^{づみ}取^とそへて。ふりかたげたる拐^{かた}のつくく二人^{ふたり}を見るより。ヤア女房^{にようばう}清瀧^{きよたき}。さよ姫君^{ひめぎみ}かとかけよつて。頭巾^{づきん}をとれば英太郎^{えいたろう}。姉妹^{せいてい}夢見^{ゆめみ}し心地にて。

積^{つも}る思^{おも}ひのうさつらさ語^{フシ}りもあへずなげかるゝ。太郎^{たろう}も涙^{なみだ}おしぬぐひ。扱^あ某^{きやう}去年^{きよねん}の秋より都にのぼり候所に。天皇^{てんかう}方の人々を始^{はじ}。玄能^{げん}婆^ばと異名^{いめい}する程^{ほど}の石屋^{いしかや}が母も。某^かを舩^{せがれ}茂藤^{もとう}治^ちとおもひ。うまくとたばかりおふせたるゆへ。御迎^{ごむかひ}の書状^{しよじやう}を遣^{つかは}してより。御^ごのぼりの日取^{ひとり}を(六十八ウ)考^{かんが}へ。千墳^{せんぶん}の城^{しろ}普請^{ふしん}の御影^{みかげ}石^{いし}を取に参るといひ立。此程より毎日これ迄御^ご迎^{むかひ}ひに罷出^{ひで}候所に。今^{けふ}日^ひ只今^{ただいま}姫君^{ひめぎみ}に巡^{めぐ}り合^あ奉^{ほう}る事^{こと}。弓矢^{ゆみや}神^{かみ}の御引^{ごひき}合せと。申^う上^{じやう}ればさよ姫君^{ひめぎみ}。母上^{ははじやう}に別^{わか}れてより半年^{はんねん}余^あり。本^{ほん}国^{こく}櫛^{くし}田^でに忍^{しの}び居^ゐて。姉^{あね}さまのいかひお世話^{せわ}。とにも角^{かく}にも御夫婦^{ごふうふ}の苦^{くる}になるのがわしや悲^{かな}しい。はやふ夫^{つま}の狭手^{せあ}彦^{ひこ}様^{さま}の。おはする所へやつてたべ。あひたい見^みたいと計^{はかり}にて。かこち給^{たま}へばイヤとよ姫君^{ひめぎみ}。やすくと身^み二^{ふた}つに成^な給^{たま}ふ迄^{まで}。石^{いし}やの内^{うち}にかくまひ参^{まゐ}らせ其^{その}うへで。主人^{しゆじん}大友^{だいう}の宿^{しゆく}柵^{さく}狭^せ

手彦殿の御座なさる、北国へ（六十九才）御供申すと。聞より妻の清瀧が。そんなら御主人狭手彦様の。お行衛がしれたかへ。ヲ、とつくと聞合せた。越前の国にて玉穂の宮を守奉り。今御謀叛の御催しまつ最中。主人の御父大友の金村公も。今は大野の長者と名を改メ。御一所にござると明細に承れば。御平産なされなば姫君の御供して北国へ下るそれ迄は。玄能婆をたばかりが肝要。やはり拙者は石工茂藤治。さよ姫君をおさよといふ下女にして。女房お瀧が国もとよりつれてきたと人にもいふ為。身の廻り迄用意したと。風呂敷包ひつほどき。女房。そなたからちやつと（六十九才）着かや。早ふくとしり立られ。いつしか馴ぬ木綿布子を清瀧が。ついひん結ぶまへ帯の。結びめ高きも。賤きも。女は衣裳といふではないか。コレ此様なて、ら布子を。姫君様に着せますやうになりくだりし。拙の御運や痛はしやと。涙ながらに。着すれば姫も黒の木綿の二重帯。つくね結びの小女郎風見るに悲しく清瀧が。わつと噎ば。身の界行の浅ましやと。歎きしづみし姫君の。心を察して英太郎涙ながらに。二人が着捨し。小袖を油単におしつゝみ。拐にかつつけア、めでたいく。此石工の茂藤次が。九州より呼よせたおかさまのお瀧女郎。下女のおさよを供に（七十才）つれてはやごんせと。歎きをまざらす夫がわざくれ。女房は姫の手を引いていざなひ行や都の空。お主は下女に品くだり。家来は主に成りかはる。太郎夫婦が。忠信の。心遣ひぞへせつなけれ。思はぬ恋の柵に。むすぶ縁の縷帯。鳥飼の御后。御産の月は近付ど。高安上の山御所に引こもり。一向仏法に入せ給ひ。非道の帝の御手にかゝりし。十二の局の亡跡を。吊ひ給ふぞ殊勝なる。

科戸の局憚りなく。帝様のお嫌ひなれば。けふは仏事の取沙汰御無用に遊ばせ。御養父平群の大使主高鳥公諸共。此御所

へ(七十ウ)御シ入のさき走りが参りさふと。申シもあへぬに御門に轟く御車の音管籥の声。后を始め女房達出向ひ給へば。武烈天皇積悪無道の御身にも。比翼の鳥や鳥飼の。君にひかれて大使主高鳥も共渡御有ッて。ホ、聞しより顔もやつれぬ。此程久しく隔てすめば。心ならず来つたりとの給へば。

いやとよ自よりは君の御不例。いかゞ渡らせ給ふぞや。ヲ、朕が病は日を追て快し。其うへ泉州堺の津へ。唐船着岸して。古今の名医渡ししゆへ。唐土の儀に事なれたる当麻の次郎速風。かの医者をつれ来り。今日(七十一オ)此所にて妙薬調合する催しと。宣旨あればア、それは何よりお嬉しや。さぞ父うへにもお悦び。イヤサ娘。懷妊の身に何かの心遣ひは不養生。おことが実父英大夫はなぜ見へぬ。お許なるぞ大夫。とよぶ声にはつと御前に平伏すれば。

いかに英。後の御懷妊故付ケ置る、穩婆。今日はいまだ出仕せざるか。さん候高鳥公の御内意とて。一人の下女を召つれ。先刻より伺公せし故。お次にひかへさせ候。ヲ、其筈。後刻此方より召出さん其旨を伝へよ。畏。て候と英大夫お次へへ立ッて入れれば。

当日の奏者罷出。当麻の速風唐(七十一ウ)の医者を召つれ候と。聞より高鳥。異国の人に后の対面叶ふまじと。女中を奥へす、めやれば。伴ひ来る。唐医の立出。頭に鷹紗帽身に欄衫。一札のべて座に着ケば。

当麻の速風謹而。先立ッて奏せしごとく。是こそ唐土。金陵の韓林伯と申ス医者にて候とのべければ。大使主笏取なをし。いかに韓林伯。君の御悩の様子を聞き。申越れし妙薬の一味。早速調へ置たれば。今し日此所にて調合あれと。いへ共唐医はうな付クばかり。すうらんぷくめいらちよばいと。挨拶しても一つも通ぜぬ唐人詞。当麻の次郎引取ッて。まづ

く天脈てんみやくを窺もせ申もふ（七十二オ）さんと。韓林伯かんりんぱくに打向うちむかひ。きむちうく。請奉しゅうほう天脈てんみやく。ちやらくさばんすといひければ。

唐医たういは黙もくして座を立上り。天王てんわうの御傍ごばうに立よつて。や、しばし脈みやくを窺うかがひ。ためつ。すがめつ龍顔りゆうがんに。目めを付つけて席せきを下さがり。

瞧科ちようこく君病きみびん是。鬼口くいかう之症しやう。たばらいくすうあんぱいと。申まをにぞ。

速風そふう心得こころえ。善哉ぜんさいく。きくめいつう。いんきやと。いふに唐医たういは玉体ぎよくたいに指ゆびさして。りよくめいきうつう。ちやぐいすとうば

あ。いんつう。たばらんく。と。受うつ答こたへつ唐音たういんおはれば。

当麻たへまの次郎じちやう。只今ただいま韓林伯かんりんぱくが申せしは。君きみの御腦ごのふさかんなる時は。人の生血いきちを好給このみふ事酒ことしの（七十二ウ）ごとし。是はまさ

しく鬼口きこうと申病まひ。初産臨月しうさんりんげつの孕女はらみの腹はらをさき。胎内たいないの赤子あかこの血ちをしほり。調合てうがう致いたす妙薬めうやく有あり。これを名付なづけて児干ちこぼしといふ。

はやく其一いち薬やくを調給てうくはゞ。即時そくじに御快然ごくはいぜん有あべしと。今いまのごとく唐からの詞ことばにて答候こたへと申せば。天王龍顔てんわうりゆうがん殊ことにうるはしく。

朕みづかが病まひは鬼口きこうと名付なづけ。文字もんじには鬼おにの口くちと書かくと。新羅しらぎの国くにの沙門しゃもん法明ほうめい国師こくしが申せしが。今いまの医師いしが詞ことばと符号ふごうすれば。彼は

天晴名医あつばれめいに極くつたりと。御悦ごえつびの勅みことり。

高鳥承たうハルり。其趣そのをとくより当麻たへまの次郎じちやうが伝でんへし故ゆゑ。玄能婆げんのうばと申て。則君すなはちの御用ごようを（七十三オ）勤めいる。石大工茂藤治いしだいくもふとうぢが母はは。名

譽よの術じゆつを得たる穩婆えいばなれば。今度后こんどこうの懷妊くわいにんにも付つけ置おく。其外下そのほかしたさまに彼かれを頼たのむ産婦さんふすくなからず。それが中なかもつゝ

出し。一人つれ来り候きこと奏そうすれば。次郎重而じちやうじゆう。孕女はらみの腹はらをたち。赤子あかこの血ちをしほるにはさのみ秘伝ひでんもなく候きこへ共とも。其期迄そのき

は懷妊くわいにんに。事ことの子細しじを深く知しらず。身みを清め衣服いふくを改あらたせよと。唐音たういんの内に申含ま候きこ。ヲ、其段そのたんは此高鳥このたうハルがのみこんだ。誰

か有あル。玄能婆げんのうばはへめせと仰おほに随したがひ。白洲はくしうに出ルは石屋いしやが母はは。供つれに連つきは佐用姫君さようひめきみ。名なさへおさよと下女したうめの風ふう。いたはしくも

又哀れなり。

平群地色ワの高鳥姫に(七十三ウ)目色をつけ。コリヤばゞ。ひそかに申付る御用なれば。下女地ウめは次へ立せ。しばらく待せよとい

ふ声に。姫ハルははつと胸打フシさはぎ。そんならかみ様わたしはあれへ。ハテとはいってもだんない事をと。しかり地ウちらし追退ハル

て小声色になり。今日此御所詞にて孕女はらみの腹を割さき。君の御薬を調合てうかうするとの御内意故。粉茂藤治が女房。国もとよりつれ来り

し今の下女。初孕ういばらみと目利めきいたし。息女夫むすこめをとの者には深くかしくつれ参候と。申上地ハルれば平群ウの高鳥色。ヲ、出かした。只今の下

女が面体。つまはづれのしんちやうさ。兼てよりふしんに思ひしが。あれは帝の御心を掛かけられし。(七十四オ)松浦佐用姫

といふ事。先立うっして写取し姿絵にてとつくと見しる。其地ウうへ石工さきの茂藤治めは。姫が傳めのと兵庫の助にいさうつし。彼是ハルもつ

て心色へず。ば、儕詞が粉では有ルまいがなと。目地ウに角立かどてきめ付れば。

ホ詞くくく。思ひもよらぬけうこつな御ふしん。あの。下女地ウのさよめが佐用姫に極らば。嫁よめの瀧たきが才覚さいかでかくまい置し

かは存ませず。粉は私が産うみの子。兵庫の介に似たにもせよ。其地ウお疑は晴はされまして。帝さまへのお取うなしといはせも立たず当

麻まノ次郎。ヤア君への取なしとは。身の程しらぬ匹婦ひつふめ。面体めんていは似たれ共。兵庫ノ助で(七十四ウ)ないといふ申訳には。

佐用姫が腹を粉茂藤治にさかせい。此義フシは。いかゞと窺うかがへば。

ホ、頓智とんちの速風。孕女はらみの腹をさく口伝くでん。唐土もろこしの医者めしやに汝なよつく聞き合せ。玄能婆げんのふばに教おしてやれ。先々ますく君には入御じんぎよなり給へと

奏フシすれば。

天王御座地色ワハルを立せ給ひ。朕詞がやまふが愈いゆるならば。たとへ百人千人でも。孕女地ウの腹をさくはいと安やすし。高鳥速風。其老女唐らうぢやの

医者地ハルを伴へ。いそふれやつと引つれて奥オクリのへ御座おましに入給ふ。

かゝる折しなどしも科戸ウの局色の声として。婆ばの供コのさよは何所いづくにぞ。御用地ハルが有ルとよはるゝにぞ。アイといウらへて佐用姫君中。庭の

(七十五才) 白州しらすに立出給へば。

ナフおさよ。太事詞ない。近地ウふく中と招詞きよせ。お后詞さまの御兄はなふき。英太郎伊企いきな儼殿な。石工いの茂藤治きに。顔形さの似たるを幸さいわい。

玄能婆むすこが息こと成ておはすれば。我子地ウの茂藤治ちが死シんだ事は露ろしらず。心ウをゆるせば。主人しゅじんの姫きをもうらなくかくまい参らすると。此間ウもこまハルくしいお后ハルさまへのお文ウ。其お返事フシなるぞ。伝フシへてたべと渡さるれば。

おさよは文ハルを袂色に入詞し。ヤアあれく表御門ウより誰ウやらん人音ひとねする。

お局地色ウさまにはまあお入と。すゝめやれば中門中より。とばかはして入り来る石屋いしやが弟子でし。異名おなも狼おおかみ団八だんぱちが。姫きを見付みけて。

ヤアおさよ。む詞ごいぞよく。かふいふたらば(七十五ウ)いやらしハルかるが。此鼻はなが心こいきは伽能きやじやぞよ。そさま故ゆゑに。

はいりにくい。此御所このごしょの御門ごもんを。かみさま迎むかひと偽いつはりつて来たきはいのと。しなだれか、れば。

ア、うるさ団八殿だんぱち。人ひとが見たらなんとさつしやる。なんと、いふたら口くちくするのじやと。髭ひげ頤おろをすり付くれば。コレあた

いやらしい痛いたいはいの。エいたい時分ときぶんじや有あまいがな。ハテはなさしやれ。そんな機嫌きげんじやないはいの。ないとはつらいと。

じつとしむる手てさきをぷつちりあいた、た。いたくば放はなしやと突つのけて。コレ褌けにも晴はれにもたつたふたりの傍輩はうざい。そんな事

してもし。茂藤治地ハルさま御夫婦ごふうふへ聞きへたら。ム、こはいといふ事か。よいく。(七十六才)ぬつぺりこつぺりといふてなびか

ねば。こつちにも思案しあんがある。親方おやうが松浦まつらへいかれた時。ついてくだつてそしりはしり。聞た事きいたこともあれどだまつてゐるぞよ。

内義のお瀧女郎と儕を都へよび取り。めつきりと茂藤治のきだんがかはつて。何かの事をつゝみ隠さる。しらぬ顔してゐれば。此団八を甘いものじやと思ふかい。松浦山の石此かた。大形づいて居るぞよ。エ、イそれをこなたに。ソ、それ其様に驚くので妖あらはす。儕は。お尋の佐用姫。しかも。狭手彦ががき迄孕で。どんばらは籬に瓢箪。今おれになびけばよし。いやと(七十六ウ)ぬかすと。まつかふと小腕ねち上手拭しこきしめく、らんとする所へ。始終を立聞く英大夫。遣戸口よりつつと出。団八が首筋つかんでどうと投す。するりとぬいてむね打に。りうくくくと打のめし。姫をかこふてつ立つば。

つらすりむくつておき上り。爰な親仁殿は何科有てと腕まくり。ぎしみかゝるをはつたとねめ付。ヤア何科とは此御所の守護。英大夫美知雛を見しらぬうろたへやつ。むたいの不義を働けば。ぶち放すやつなれ共。天皇行幸の折からなれば命は助くる。うせ上らふとけとばされ。したゝかなめに狼団八。ほうくくにげて帰りける。(七十七オ)

大夫は姫の塵打はらひ。御いたはしとは思へ共。さあらぬ体にてこりや女。聞ばそちは懷妊そうな。氣をしづめて罷立と。情も厚キ一言に。さよ姫はつと立さまに文を袖より取落せば。英太郎様鳥飼よりと。上書よむより大夫取上ヶさつとひらけば。ナフ其お文はと。すがり付を。突のけくとつくとよみ。ハ、思ひがけもない。此文体を見れば。石工の茂藤治といふは。我子の太郎と。心に納。ヤイ女。か様の文を其方が懷中して。余人が見れば事むつかしいと。取納の時しもあれ。出御なりとよばゝる声。武烈天皇大使主高鳥を召具し檻に出給へば。(七十八ウ)唐医を伴ひ当麻の次郎。玄能婆は広蓋に。目結の小袖唐綾の中重。下着うはおび取揃へ。うやくしくさゝげ出。

コレおさよ。そなたを佐用姫といふ事。おれが黒い目でらんで置た。ア、是それは。イヤ隠しやんな。しかも産月うみづきで有ぶがの。此度お后様の。御産さんの御用勤ごようきん。穩婆とんあけのばアで。そなたの望のぞみの通とほにしておます。狭手彦殿さでひこの有ありかゞしれたれば。佐用姫を送り届いたけてやれと有あがたい勅みことり。お身みの廻まわりを改あらメ給たまへと誠まことしや。かに欺あざむけ。姫きみはあどなくまうけにして。お情じやうぶかい帝様ていさう。今迄恨うらしもつたいなや。ゆるさせ給たまへとあなたこなたをふし拌まみく。(七十八才)そゞろに成なて。悦給よろこふ御ご心根こころねぞいたはしし。

平群へいぐんの高鳥たかとりしすまし顔かほ。さよ姫を。狭手彦がもとへ送り届いたける。路次ろじの警固けいこは当麻とうまの次郎じやう。英大夫えいだふ兩人りうにんに申付まをる。誰たれ参まをれ乗物のりものもて。それくば。姫に衣服いふくを改あらさせよとせり立たれば。下女げにようのなりふり。引ひかへて。花はなを粧まふ衣紋いもんの着きなし見みかはす。姿時すがたときの間に。殺ころする事はしら露ろの。奥おくのお庭にはへ乗物のりものを昇あり入いれば。

サアくちやつと召めませと。婆ばが指図さしづに姫は嬉うれしく。そんならわたしは参まをります。皆みなさまのいかいお世話せわと計はかにて。礼れいもそこく乗物のりものに。のれば外そとから戸かどをぴつしやり。さしもの高鳥たかとりはつとため息ためいき。ヤア治郎じやう。(七十八ウ)其佐用姫そのさようひめを一旦いつたん汝なんが屋敷いさひへ伴ともひ。委細いさいの様子ようすを大夫だふにも告つげしらせ。兩人りうにん共に必疎略そりやく仕しルな。はやく急いそげと下知したせられ。はつとはいへど英大えいだい夫ふ。いぶかしながら乗物のりものに。ひつそひゆけば。

当麻とうまの次郎唐医じやうたういに近付きんづ。ちやるめいだばらん。ふうけんくと。いひ聞きすれば。医者いしやは玉座ぎよくにいとまごひ。けれんげくきうくめいと。低頭ていとう黙礼もくらい一揖いちいつして。次郎じやうに随したがひ。退出たいしゅつする。

科戸局しなどの御帳台みでうだいより走り出はしりだ。鳥飼はるのお后様ごうさまには。先程さきほどより奥おくにて佐用姫さようひめの命乞いのこひあそそばせ共ども。御ごン聞届きどけなき故ゆゑに。兼かみてより新羅しらぎ

の国の法明國師おしへの教に任せ。けふよりは(七十九才)尼あまと成り。姫ひめの菩提ぼだいを弔とむらひ度キとの願ひなりと奏そうすれば。

武烈地色ハル天皇とびかゝつて。科戸しやとの局こをひつつかみ。ヤアきつくはいなり。佐用姫いづたんちんは一旦朕わがが心に背そむき。松浦山にて石に成しと。

欺あざむきし罪科ざいこかるからず。それをいたはり。仏法をすゝめ込こまはうぬがなすわざ。観念地ハルひろげと局ぼが細首ほこ。ぐつとゆがめ

て。ぶつつと捻切ねち。

詞詞コリヤ婆ば。さよ姫をかくまふ茂藤次。二心にしんあらば。此局こめがよき手本といひ聞せよ。ハ、くく。心地よし。一たび

恋せしさよ姫が思はず手に入り。朕わがが服ふくするくすりとなるも是ふしぎ。高鳥参れ。茂藤次が母はや帰レと。暇いとまをたびて入御じゆぎよ

なれば。(七十九才)重おもき仰おほに石屋いしが母。いそく。いさむ老の波立帰る。こそへ河内路三重や。

高安郡地色ウの奥山に築城ちくじやうの勅令はくを蒙かり。石大工の茂藤次が都うを爰にかり住居。其茂藤治ハルをそのまゝに似たる形かたちの英太郎。夫婦

もろ共石切に。いしくも寔やつしさよ姫の。介抱かいほうなをざりなかりけり。国地色ウくより権付けんつけに運漕うんそうしたる石のかずく。津うの国みか

げ松浦石吉備きびの白石城普請しらいしやふしん。急うギの御用も月に六日の。休中とて。手間取り人歩地色ハルはやすめ共其身は心に油断うなく。弟子の団う八

相手にて。根ねが素人しろうとの青め石今は細工こも手に入て。詞詞コリヤ団八。日比からそちが(八十才)わざくれ此茂藤治が。松浦より

女房瀧めをよびよせたれば。力ちからで仕込こま石細工しよろがぬけたと笑ふたが。けふはわぬしがめつきりげんにやり。玄能打げんのうち

もうつらてん。ゆふべどこぞの毛輻けふいこで石切のみのさき付たか。イエそうじやごんせぬ。山御所へかみ様迎ひにいたれば御用

が有ルに。早ふうせたとゑらいめにありました。ム、そりやそちが慮外りょがいでもしたのである。やすみがてらにま一度迎にいてく

れい。下女のさよめを付けてやつたれば女房共が氣遣ふ。イヤ内義さん計じやごんせぬ。あのおさよにはこなさんもきつい

心遣ひ。(八十ウ) 下女じやないしつかいお主じや迄。コリヤやいべりくとはか尽すな。只さへた、はしい母者人に。そんな事いふてたき付ケまいぞと。又ふり上る玄翁石鑿。音はかちく門口より。とつかは戻つて女房お瀧。ナフこちの人茂藤治殿。道迄出向ふてもば様はまだでござんす。御所へやつたればおさよが事が。サアおれも氣遣ひさに団八頼めば。屋敷でひどいめにあふたとて四の五のいふ。爰から山御所へはつい一トまたげ。おれが迎ひにいてこふかい。イヤこなさんがむさといかる、所じやない。これ団八殿。山御所へゆく迄なし。大かた道であはつしやろ。ム、皆迄(八十一オ) いはんすなこんだく。あのひんこばさまの顔見たふはなけれ共。おれもおさよが事が氣にかゝる。君につかはる身ぞつらやでござんすはいのとつぶやきながら。出て行。

エ、先の茂藤次が遣ひし弟子と。今迄は了簡せしが。ひよんな事は姫君に。むたいひろげばまくしださずば成まい。サイナ。わしもそう思へ共。茂藤治殿に顔形が似た計で。仕付ケもさんせぬ石屋のわざ。あの人だしたら不自由にある。大概な事は了簡したがよござんすと。立もふ拍子に前だれの袴にさはつてちりんりん。袴を。お瀧が見付てヤア。此かんざしは(八十一ウ) たがおとしたへと。とはれて夫はさよつと顔。なんじや其袴か。それはさつきに。庄屋殿のおむすがわせたがと。どぎつく詞のさき折つて。コレ。此やうなはでな袴。此地下にさす者はないはいな。此春からの爰も住居。道さへろくに覚へねば庄屋殿の娘御は。かみさま迎ひにわしがつれ立っていた共しらず。ぬつべりとあの嘘はいの。もと傾城くるひからのこなさんの流牢。松浦へ来て兵庫の介と名をかへて。此清瀧と夫婦に成て。ヤイこりやそれをぬかす事かい。イヤくいろぶかいこなさん。どこぞの女子か小娘をそゝなかつて。わしがるすへよびよせ。(八十二オ) じやらくらしたはづ

みに落した此^{かんどし}筈。コリヤやい。世間で玄能^{ぼん}婆と異名する。アノばさまの目をくらまし。息子^{むすこ}の茂藤次に成すまして居る英太郎伊企^{いきな}。其様な乱^{みだ}な事してよい物か。サそんなら此^{かんどし}筈はたが落していんだへ。狭手彦様の御家来のこなさんにつれそへば。佐用姫さまはわしが為に。腹^{はら}がはりの妹なれど今ではお主。殊に産月^{うみ}どうかかうかと。あんじる中からよい氣では有^{いろ}はいの。ハテ扱^あ。それはそなたの氣の廻り。イヤ／＼筈の主がしねばいつ迄も。疑^{うたがひ}はれぬと恨泣^{きん}。すいなやうでも。地女房^{ぢにやう}の。愔氣^{うれ}は涙はてし（八十二ウ）なし。

かゝる所へ母はいさんで立^た帰り。ヤア内義そなたはなんで其涙。おれが供につれていた。さよめが戻らぬによつてか。氣遣^{きで}ひしやんな道からちよつと使^{つかひ}にやつた。ナンノそんな事じやござんせぬ。あんまり内がふすばつてと。いふをねめ付^め。エ、いま／＼しいすつこんで居や。けふは帝様より茂藤治に。又細工^{またさいく}の外に御用仰付られ。めでたい折から泣顔見れば氣^{いろ}にかゝる。ハア御用とは母じや人。なんでござります。ヨ、此母が幅^{はば}で。そなたに手柄^{てがら}さする。帝さまの御病氣なをす妙薬。拵^{こしらへ}やう迄習ふて来た。奥^{おく}へいていひ聞^{きか}そ。内義^{うちぎ}。それにつゐて（八十三オ）追付^{おき}是はお客^{きやく}が有^あル。おうへも掃^はて待^{まち}ッてゐやと。わめけば茂藤次。イヤ妙薬^{せうやく}の製法^{せいほう}御伝授^{ごでんじゆ}とは。あさらい住居の奥も端^{はし}近^{ちか}。アイ納戸^{なんど}へといふにうな付^つ。只そなたは物事に念^{ねん}が入^いル。それでなければ大事^{だいじ}の御用は勤^{しん}らぬ。サア／＼おじやと納戸^{なんど}へへ親子は入^いにけり。折もこそあれ。門口^{かどぐち}に数多^{あまた}の人音^{ねおと}。縄網^{なわあみ}かけし乗物^{うち}か、せ。警固^{けいこ}の役は英大夫当麻^{うま}の次郎。ずつと通れば。茂藤次引つれ母は奥より。ほや／＼顔^{いろ}にて立出^{たて}。コレ嫁^{よめ}。うろ／＼せまいと呵付^{しかり}ケ。兩人が前に手をつかへ。御用^{ごよう}の様子^{ようす}は駈^{かけ}にも。申聞^{まうもん}せ候と。親^{おや}の敬^{うやまつ}ひ茂藤治^{はる}は。打^うしほれたる。（八十三ウ）あんじ顔^{いろ}。当麻^{うま}の治郎きつと見て。ヤア妙薬調合

の様子を聞て。当惑したる其方が顔色。中く御用つとまるまいと。見こなされて氣を茂藤治。かりそめならぬ藥の調合。只今母に伝授をうけ。工夫をこらすを御ふしんは。其元の御短慮と。一本さすれば英大夫。ヲ、下郎ながらも公用を勤ル。器量あらはれ尤のいひぶん。妙藥の拵方は汝が働にて。人の命を助るが肝要。其助る命はナ。合点がいたか。帝のお命。ホ、ウ其段はちつ共御氣遣ひあられな。妙藥製法は奥の一間。はや用意仕らんと。茂藤治立て（八十四オ）入りければ。次郎速風下部に下知し。其乗物の女はへ伴へ。はつと立より雑人共。縄あみとく戸をひらけば。狭手彦さまのおはする所は爰かいのと。立出るはさよ姫君お瀧は。懔。ヤアおさよ。そなたは思ひがけもない。あの乗物に乗つて結構な身のまはり。コリヤマあどうぞいのと。とはれて姫もいぶかしげに。さればいなわらはが身の上。茂藤治の母のしらせにて。天王様のお耳にたち。狭手彦が有家しれた故。自を送り届るとて。爰はやつはりばの内。始の嬉しさ引かへて。合点がゆかぬと有ければ。ばはつ、立コレさよ姫殿。こなたが（八十四ウ）めろくほへるによつて。狭手彦の有家がしれた。つれてゆくとはうそのかはと。いふにお瀧がこれかみさま。そふして姫君をどうなされると。目に角立てとひかくれば当麻の次郎。ヤイ茂藤治が女房。察する所儕れさよ姫が由縁じやな。子細しらずんば申聞せん。有がたい事じやと思へ。是なる玄能婆が訴にて。狭手彦が種を懷妊の事露頭のうへ。帝の御惱平癒の妙藥に。産月の腹を立わり。赤子の血をしぼり取ル。是を名付て児干といふ唐医相伝の調合。その御用を茂藤治が勤るはい。エ、イ。それと聞て茂藤次殿が。（八十五オ）ヲ、いやとはいはさぬ親の権柄。さよ姫なきやんなもう叶はぬと。聞より二人はわつと泣。前後ふかくに見へけるが。さよ姫涙に。くれながら。

去年地色ウの秋母うへにおくれてより。心ハルづくしの海山こへ。尋来りしかひもなく。狭手彦さまの行衛はしれず。どうぞあひたいくと。思ふ一図にだまされて。帝さまのお情にて。殿御のもとへゆくと思ひ。たつた今迄嬉しかりし其百倍色バ。悲しい共上つらい共。自が命はおしまね共。不便なはおなかなかやゝ。いかに薬になればとて。あんまりむごい帝さまと。くどき立。くクルきへ入計ノル中フシに。なげかるゝ。

お瀧も涙のかほハル(八十五ウ)ふり上。遁ウツがたない姫君のお命。どうぞ助ける思案もてだてもない事かと。頼に思ふ夫迄オツト。天王さまの御威光にて。お主を殺すを有がたそうに。御用じやの。公用じやのと悦んで。罰もむくひも思はずか。不忠者の我夫を。いけてはおかじと奥をめぐけ。かけ込ムお瀧を。ばゞは引すへ。コレお主くとさよ姫を。そなた一人リがかばふたとていつかな叶はぬ。人そばへしてむす子の茂藤次をなんとする。エゝにくやのとたぶさを取て。ねち付くうごかさねば。

次郎地色ハルいかつてヤアく茂藤次。用意よくばさよ姫が腹をさけ。時こそ移れと呼出し。御葉ミクナリの(八十六オ)器うつはものこれなるぞと。銀ウの壺つぼさし出せば。茂藤次受取これく姫君。御歎ミナキは断なれ共。君の論言もだしがたし。はやとくくとあらけなく。歎もだへる姫君をひつたて。奥に入りければ。

イヤくく。なんぼでも殺させぬと。又もやあせるお瀧を母が引ッすゆれば。障子しやうじの内にはナフ待たべと姫の声。叶ぬ事と茂藤次が。なげたかふんだかばつたく血煙ハル。ばつとくまどり立て。明り障子はびりくく。外にはお瀧が歎く声。内にはわつとさよ姫の。悲しきこはね赤子の声。たゞ叫喚けうはんの其くるしみ。扱こそ武烈天王の。孕女の。腹をさかせ給

ひ（八十六ウ）しと。世にいひ伝ふは。これなりき。

程なく茂藤治。血しほに染しぬき身をひつさげ。壺を小脇にかいこんで。兩人が前に罷出。勅命によつてさよ姫が腹をさ

き。胎内の子の生血をしほり。製法は唐医相伝の通に仕候と。壺の内より赤子の死骸。引出して改メ見すれば。ホ、天晴な

る働。此妙薬調ふ上は。一刻もはや罷帰る。御褒美は不日に御沙汰あらんと。次郎壺をうけとれば。英大夫せきくる涙

をおしかくし。ナフ速風殿。しらるゝ通狭手彦は我主君。それにいひ号の姫君の亡骸。申受て葬たし。此義いかゞと尋

れば。ホ、ウ（八十七オ）其段はともかくも。くたばつた姫が死骸にかまひはおりない。某は帰り申ス。茂藤次。佐用姫が

傳でない證據はたつたぞ。婆さらばと。雑人引つれ立帰れば。

英大夫門口迄送つて出。ヤア茂藤次。用が有ル是へ出い。はつといらへて。立よる所をぬき打に切付るを。庭に有あふ玄能

おつ取りてうど請れば。女房お瀧かしこの拔身。取ル手も見せず姑に。お主の敵と切てかゝるを。こなたがはずせばあな

たがばちく。庭と。上とに四人が二はな。手だれの茂藤次切石取つて小楯になし。姫君を殺したるおとがめならば。申ひ

らく子細有りといはせも立ず。（八十七ウ）ヤア儕しが身の上しるまいと思ふか。コリヤ。此一通が今山御所にて身が手

に入り。我盼太郎伊企儼と知たる故。たのみに思ひ姫君の御命を助ケよと。よそながらにいひ聞せたるかひもなく。主殺し

の罪人め。五刑をのがれ親の手討を有がたいと。尋常にくたばらふと又切付るを。ナフ待てたも。自は生て居るはいの

と。奥より出るはさよ姫君。ヒヤア扱は姫君に恙はないか。エイお前におけがはなかつたかと。お瀧がびつくり婆も大夫

も。是はくゝと計にて。さらにふしんははれやらず

茂藤次は姫の前に揖讓して。最前は無いぶせくもおほしめされんが。(八十八オ) やすくと敵をたばかつたれば。父大夫殿にも御安堵なされ下されと。いふにばがヤイ茂藤次。お上をたばかりさよ姫を助るのみならず。大夫さまは儕を子。儕は又大夫さまを。親のやうにいふ。其訳ぬかせと。たけりかゝるにちつ共さはがず。ホ、ウ合点がゆくまい。老人の氣をもまず共とつくと聞ケ。イヤ親にむかなふてづ大へいな。イヤ親でない。某はあれ成ル大夫。美知雛殿の嫡子。英太郎伊企雛といふ者。今日の只今迄茂藤次に成すまし。此家に有れば我子と思ひ。心をゆるしたればこそ。姫君の危き御命を救ふたりと。聞よりあせつて。そん(八十八ウ)ならおれが子の。ほんの茂藤次は何国に居る。早ふあはせて下されと。仰天すれば。ヤアく女房。兼而用意の物こなたへと。差図にお瀧が納戸より。一つの箱を携て。夫の前にさし出せば。コリヤ。粉茂藤次に逢たくば。其箱をひらき見よ。なんじや是をひらけば。おれが子にあはれるかと。にじりよつて蓋とれば。塩に漬たる首一つヤア。是が我子の茂藤次が首かいの。何科有て此ありさまと。むせび入れば。ヨ、何科とは。我主君の一太事を。天皇がたへもらすくせ者。去年の秋松浦にて手につけ。顔形の某に。すんぶんちがはざるより思ひ(八十九オ)付キ。姫君をかくまはんと茂藤治に成かはり。暫く世を忍んが為の謀。宮の御代と成て二たび英太郎と。名のる時のいひひらき。茂藤治が親類共。父大夫殿へも御目にかけんと。扱こそかくははからひと。語ればいと母は愁歎。大夫は安堵の思ひをなし。姫君をたすけたる忠節は驚き入ル。然るに最前の赤子。何者の腹をさき。当麻の次郎を欺きしぞ。子細はいかにと尋れば。イヤ其涙はと。つい打明けて得もいはぬ。太郎が心を察しやつてさよ姫君。最前奥にて待てたべと。太郎をとめても聞入レなく。殺しやつたは大夫の娘御。鳥飼の(八十九ウ)后さまじやはいのと。聞よりはつと父

がびつくり。玄能ばゞは狂氣のごとく。后さまがいつの間に。此家へ来て殺され給ふ。まだお息が有ならばと。障子をひらけば鳥飼の御后。あけにそみたる御有様。ナフ悲しやと。いだきかゝへて。歎くにぞ。人々かけよりいたはれ共。はや御息はたへはてゝ。其かひさらになかりけり。

婆はせきくる涙のひま。今迄はお后さまと。うやまひ尊敬したれ共。此期に望んで何かくさふ。そなたはおれが産の娘。母と一言いふ事も。叶はぬかいのいとをしやと。不覺の歎きに人々驚き。ヤア后をそちが娘とは思ひがけなや。狂氣はししつるか。と。(九十オ)とはれて涙。おしとゞめ。

狂氣とはきよくもなや。恥しながら此ばゞが身の昔は。三輪の市の旅籠や。吉郎が娘の置目といふ者。年経たれば大夫様にも。お見忘れなされふが。其比はまだ十六七の娘盛り。御狩の使に大夫さまの。こちの在所へお出なされ。たつた一夜のかりのやどりにかりのお情。身にやどしもふけし子は。太郎そなたと。死んだ茂藤治。此お后。一度に三人よろこびしは。類ひまれ成る三つ子にて。男は誰ぞとせんぎにあひ。たつた一夜の契りにも。名所を聞しが手がゝり。三つ子の恥辱を隠さん為。親達のはからひ(九十ウ)にて二子と偽り。大夫さまにつきつけ。跡に一人り残し置いて。そだてたは茂藤治計。

コレ太郎。御身と顔形が似たるのが。兄弟三つ子の。證據ぞや。

其後都の石屋へ嫁入。後家に成し其時は。茂藤治はまだ若輩。穩婆を渡世にして。お公家様や武家方へ立入て。太郎殿や鳥飼のお后を。大夫さまの子と聞けば。おれが産だむす子や娘と心一つに。人には深くかくせしが。今度はお后の御産の御用を。勤るも親子の奇縁。まめで平産有やうにと。日本国の神々へ頼をかけ。我娘を太事に思ふ百歩一。佐用姫さまをい

たはらば。今此うきめは有ルまいもの。姫を（九十一才）殺せば御褒美もらふと。欲にばかり目がくらみ。我子にむくふ天の責。皆此母がなすわざと。死骸にひつしといだき付大声上て泣さけば。大夫親子姫君お瀧に至る迄。一念発起の。母のなけきを思ひやり。不便さはれさいやまして。とかふいらへもなく計。

英大夫はやうく面を上ケ。三十年來の昔がたり。三つ子と聞けば茂藤治も我扮。一生父を父共しらず。心からとはいひながら。身の果は浅ましきあのさま。後は一期母を母共きまへず。忠義の為に。兄が手に掛りてむざんなる此有さま。御子をまん（九十一才）そくにうむとても。悪王の御種。宮の御代になるならば。敬ひかしづく者も有ルまい。出かしたそちがしんだで親兄が。忠義がといて悦ぶぞと。おくれを見せぬ父が詞に。太郎も涙おしかくし。コリヤ女房。最前そちが愠氣せし筈は。今は後の形見ぞや。思ひがけなふ賤の姿に身をやつし忍びきて。けふ佐用姫の一生懸命。産月の腹をささ。帝の御病氣平癒の妙薬その指人はばの願ひにて。茂藤次に仰付らるゝ。其茂藤次を兄さまとしつたこそ。狭手彦さまへの忠義の手がゝり。懷妊のわらへを殺し。（九十二才）姫君助けて給はれと。兄も恥入ル後のけなげ。心得たと請合たその時の。心の内の切なさ。親父さま推量なされて下され。女房瀧に知らせてはとめて互の。みれんもおこらばあしかりなんと。奥の一間に后を隠し。母の帰りを待てば程なく。さよ姫君をつれ来り。のつ引ならぬ手詰のいひつけ。畏り候と姫君を奥へ引立。様子いふ間もあるやなし。ナフ待つてととめ給ふ其内に。覚悟の后を取て引ふせ。左の脇にくつと刃をつ、込で。堅にさけば臨月満たるたくましき男宮。初声上るが此母の名残り。（九十二才）器に血をしほる其時の。心は鬼に成たれ共。腹をさかれし妹より。さいたる兄が此胸は。八つ割にさかるゝ心地。思ひやつてたべ母人と。夫が歎きに妻の

お瀧。さつきには佐用姫君を殺されると。思ふ一匁のわたしが恨。もつたない刃物ざんまい。お袋さま。御ゆるされて下さんせ。ア、そのわびに及ぶ事かいの。兄太郎が姫君の代に。お后を殺さずは。欲にしこりし此ばゞが。いつか心をひるがへさふ。三人の子供が一所に。大夫さまの手にそだ、ば。茂藤次めも天晴な侍にならふ物。同じ死場でも。娘は忠義のけなげな最期。(九十三才) それに引かへなんの益なき此むだ死。氏よりそだちの世のたとへ。悪人に仕込しはわらはが誤り。大夫さまこらへてやつて下されと。身を恨たる母の諄。お道理ぞやとお瀧も姫も。後の事のかなしさを。又くり返しむせび泣。太郎も父も。互に涙たしなめ共つきぬ。歎きぞ哀なり。

表の方に積重し石の陰より。狼の団八ぬつと出。ヤア似せ者茂藤次。当麻の次郎様の仰には。跡に残りし大夫が心底心得ず。犬に成て詮義せよとのいひ付。何もかも聞たからは親子共に。覚悟ひろげとの、しれば。

ヤア当麻の(九十三才)次郎に頼れしは。団八儕レが絶体絶命。イヤすいさんなどぬき打に切り付るを。かいくゞり刀をもぎとり団八が。首と胴とのはなれぎは。ぎやつともいはぬ此世のさらば。

太郎詞をはげましてヤア／＼親人。妹の亡骸伴ひ帰ッて送葬あれ。夫婦は母人諸共に姫君を介抱し。狭手彦公へ手渡し申さんそれ迄は。我レは此ま、弟が名をかり石工茂藤次。天王がたへの聞へ有はや。御立とす、められ。

ヲ、いかにも。鳥飼の御后。御存生よりの望にまかせ。十三峠の逆修の塚に葬べしと。御尊骸をいだき。上れば。母は息のむなしき。(九十四才) 首を手にな、げめいと。しゃばの。ふたわかれ。たぐひまれ成三つ子の兄弟。英夫婦がつきせぬ名残さよ姫の。石になりしとむかしを今に。きくめいし。千墳の岩城とて。朽ぬ。其名は高島硯筆に美談をしる

しける

第五

君誦次第のめぐみもたかてらす。ハルもみぢのみゆきはやめん。忝ナラスも大跡部の皇子玉穗たまほの君。越前ウの国あぢまのより義兵ぎへいの御旗をあげ給へば。諸国ウの官軍皆宮がたに帰復きふくし。大將軍大友の宿弥狭手彦が秘計ひけいによつて。都ハルに。(九十四ウ)責入ぜめりいまだ軍はなかばなれ共。大和ウの国に宮造り。貶号へんがうをもつて玉穗ハルの都と時めきて。四方説に宮そふ初紅葉。みゆきのみさを清めけり。ナラスなふくそれなる御方に物問ふなふ。都ウへの道教わへてたべ。なんしや。物狂ひなればおしへじとや。よしく恋しき人の御花筐持たれば。とはずとなどか。まよはざらまし。君がつれなき秋風ふかは沖津ウ。しら波龍田川。水上で紅葉手折ルか。波を錦に染なせば。思ひそ出る。故郷の空の越の海。沖の波間にちら。合三下リちんくくちらめくは。しまのおばゞのくさしばつみ壳船ナフサテ。恋しき合ハル(九十五オ)君にこがれくて来れ共。つれなの人々。地色ウあはれをしらぬ大宮人。鳥の夷あびすも山がつも。物のあはれはしるぞかしと。狂ひ乱れて泣居たりく。ナラス御幕地ウの物見よりかくと観覧あいちんまして。供奉の人々にかしづかれ。玉穗ウの宮出御あれば。狂女は恐れわなきて。かつはとまろぶと見へけるが。忽本氣人フシごち君が威徳あんどくぞ有がたし。地色ハル宮御声うるはしく。丸が配所にありし時より。忠義を尽せし金村が妻の波の戸よな。娘照日の前が別れを悲しみ狂氣して。地ウ残し置し花筐を携へしたひ登りしならんと。尋ね給へば波の戸額ひたいを(九十五ウ)地地色に付て。夫金村は先帝の御時。身退しりぞきは播逃はたうの臣なれば。君へ仕ん謂いなしと都へ登らず。娘照日の前が手疵いたはりの間。明れば宮さま暮れば我君と。恋した

ふいぢらしさ。不便／＼と思ひ詰し心より狂氣して。はる／＼のぼり侍ふと奏する所へ。毒蛇の頭を貫きし。子持筋の旗押立。大友の宿衾狭手彦。野見の弥綱太を随へ馳参じ。扱も武烈天皇の引籠り給ふ。千墳の城を遠卷にいたし。数日相戦ひ候所に。立石越よりひそかに天皇ぬけ出給ひ。此二ツの御宝を奪ひかへさんと。石上の社へ押よせ給ふを。野見の（九十六才）有熊が働きに。神璽神鏡を是へもり奉候と奏すれば。君の悦び狭手彦波の戸弥綱太も。互の身の上終りつきせぬ其折から。

英大夫いきを切つて欠つけ。武烈天皇宮の御所へ直にむかはんと。防さ、ゆる諸軍を蹄にかけちらし。御馬も疲しやらん。軍中に乗り捨此道筋を一ツさんに御出と。注進すれば狭手彦。ヤア／＼大夫弥綱太。はやく君を還行なし申されよと。大將軍の仰に随ひ兩人宮を供奉すれば。波の戸御前諸共に皆／＼御所へといそぎける。

折もこそあれ英太郎伊企儼夫婦。御供申ス佐用姫君。（九十六才）当る十月におのこ産び。玄能婆に抱せて来り給へば。ヤア我妻か。なふなつかしの狭手彦さまと。鎧の袖にすがり付嬉し涙はせきあへず。

狭手彦さとき大將にて。姫が供せしあの者共が体を見るに。石大工茂藤次に似せて。敵をあざむきし英太郎よな。忠義の様子親大夫に先達而聞キ。悦ぶぞとの給へば。コハありがたき御説。今日佐用姫君御親子の御供申ス所に。武烈天皇自討て出させ給ひ。宮方の軍勢辟易して道すがらのはいもう。漸是迄御供仕り候。ヲ、さこそあらん其方は。佐用姫親子を一ト先宮の御所へつれゆけ。はやく／＼とありければ。（九十七才）作用姫はしばしの別れもはいなき思ひ。しほれ給ふを英太郎。いざなひてこそ別れゆく。

か、る所へ火雷神のあれたるごとく。武烈天皇むかふ諸軍を人礫。なき立く宮の御所へとはせ行給ふ。

向ふに狭手彦大音あげ。一天の君に似合せ奉らざる御振舞と。いはせも立すイヤきつくはいなり。狭手彦ごときにその諫

言を受べきか。朕が悪行は鬼口といへる病の爲事。児干の靈薬にて本心に立帰れ共。今迄の事悔て帰らず。三種の神器宮

手に渡つたれば我位は是迄。狭手彦儕をつまみ殺して。討死の供させんずとは思へ共。父金村が昔の恩を忘れず命を助る。

(九十七ウ) 有熊はいづくに有。角鹿の浦にて射損ぜし返報。出よやつといかりの御声。はるかに聞付野見の弥綱太欠来

り。数ならぬ身の王位の御手にかゝらんは武士の冥加と。いらつてかゝるを狭手彦制して止る所へ。天王の寵臣当麻の速

風おくればせに馳付。彼は某十三峠の山御所騒動の砌。詞をつがひし相撲の勝負仕り度候と奏すれば。天皇大きに叡感

有。今を限りの朕が思ひ出。当麻と野見に相撲を結ばせ。遊覧せんと宣旨あれば。狭手彦コハいとやすき御望。千墳に地を

ゑらみ。相撲の御遊調ふべしと勅答有。野見の弥綱太声をかけ。ヤア当麻の次郎。儕が為には先祖の敵討も(九十八オ)

同然の相撲。やらひの代に土俵の内で返り討じやぞ覚悟ひろげ。ヲ、いふにや及ぶ。儕がそつ首此当麻が取つて見せふ。

見事取かと。そりを打て欠よる二人が首筋つかんで武烈天皇。手玉のごとく左右へ投のけ。ヤア尋常の勝負はせずみれん

成ル振廻。狭手彦野見をつれ帰れ。当麻の次郎はや来れと。引別れてぞへ還御有

河内の国千墳の城外に。平地を見立て土俵をしつらひ。四本柱に引はゆる綾の水引あかねさす。東のかたやは野見の有

熊。西のかたやは当麻の速風大関にて。近郷近在の腕立好ム。若者数多前相撲に定られ。東西の新御殿に。武烈天皇玉(九

十八ウ) 穂の宮引別つて叡覧有。諸軍も共にかたつをのんで今やく。と待居たり。

塩水うたせ行司の役は英大夫。出がけは東と思ひの外。しらせの拍子木逸く。天皇がたの前相撲より小結しつかとゆりし

めく土俵入り目さましかりけるへ次第也。

大夫声かけイヤア法をしらぬか。東のかたやより土俵入を初むるが式法なれ共。それは了簡もすべきが。見れば近郷の寄

相撲のふんとして。刀をさげしは心得ずととがむれば。西の行司斑鳩団申す、み出。ヨ、刀を帯しても苦しからず。皆天皇

の御抱と。いふ間もあらせず東のへかたやがふり出す。

土俵入も事おさまれば名乗りかけく。すでに相撲ぞへ初りける。

おひ投して（九十九才）勝も有り。大ぞり小ぞり夢枕。西も東もごかくの相撲。はや是よりは関と関とのはれ勝負と。二

入りの行司は氣を張弓。弥綱太速風。ひらりくくと羽織をぬぎ捨。力足をふみしむれば。

英大夫声をかけ。東西く此相撲は関と関との太事の勝負。謹而結ばれよと国をあげ。西は当麻の速風。東は能見の有熊。

双方神妙にかゝられよと。いふ間程なくゆるぎ出たる二人がこつがら。何れもおとらぬ大兵大力。これらが先祖野見の宿祢

当麻の蹶逸。力例の争ひを今見る如く。秘術をつくしてへもみ合ける。

最初是有熊よは手に見へしが。速風力やおとりけん。（九十九才）組だる腕をふりほどかれ。又もやかゝるをしづんで有熊。

目より高く指上てきりくくとふり廻し。打付られて当麻の次郎。土俵の下より用意のぬき身取出し。切てかゝるを俵

追取受身の早業。つらに土俵を打付られ。眼に砂や入ったりけんかつぱとふすをおこしも立ず。しらす刃もぎ取り速風が。首

打おとせばすはらうぜきと東西の小相撲共。俵おつ取打付くいどみあふ。

武烈天皇一丈余りの流星槌^{りうせいづい}おつ取のべてなき立く土俵^ちの中に入給へば。宮方^{みや}には狭手彦弥綱太英親子。宮の御殿^{ごてん}を押かこ
ふて立^たならぶ。平群^うの高鳥欠^{かけ}来り。もはや(百オ)君の御運も是迄なれば。はやく宮方^{みや}へ降参^{かうさん}と泣わぶれば。エ、いひがい
なしと取ッて引よせ高鳥^{たか}が首^{くび}引ぬき。ヤアく狭手彦。君たるもの、いましめ。悪王の身のなる果よつく見よと。ぬき身追
取り首筋^{くびすぢ}に押当^{おしあて}。あゝくとかき切ッて。手づから御首^{みくび}さし出し給ふ悲^{かな}しかりける崩御^{ほうぎ}の有さま。大和^うの国葛下の郡^{かつしも}
陵^{みささぎ}と。御名も高き悪王^{あくわう}ほろび御代長久。時に大友狭手彦伊企^{いきな}儼が異国迄。ほまれ有熊^うくまなき月や日の本の。神^{かみ}の御田^{みで}の
たね太^{ふと}リ公^{おふやけみつぎ}貢^{こう}に豊秋津。衆人口^{もろぐち}に甘美^{むまし}国^{くに}万々。歳^{せい}とぞ祝しける。(百ウ)

右曲調以通俗為要故文字有

正有俗且加文采節奏為

正本云爾

豊竹越前少掾

大坂心齋橋南四丁目西側

正本屋九左衛門板